



## 年間第 8 主日 (ルカ 6:39-45)

心からあふれ出ることを語るために

今週は、堅信式を終えた中学生を意識して 2019 年説教を使いました。四旬節を前にして、神を見る目が開かれるために、私たちにとって何が視界を遮る「丸太」となっているか、考えてみましょう。

ある年、堅信式を終えた中学生と一緒に、二週にわたってイスラエル巡礼をしたときの写真を見ました。中学生に説明をしながら実感したことは、聖地巡礼は私たちを「心からあふれ出ることを語る」そういう人に変える力があるのだな、ということでした。

イエスが四人の漁師に声をかけて弟子にする。その情景はガリラヤ湖だからこそ思い浮かんでくるのです。湖は日本も数多くあるでしょう。けれども、「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう」(マタイ 4・19) この言葉が浮かぶのはガリラヤ湖だからこそなのです。

振り返って、このイスラエル巡礼は、「自分の目から丸太を取り除く」旅だと思いました。今まではっきり見えてなかったことが見えるようになって、キリスト者として生きる、キリスト者でない人に道案内ができる。そのような経験をさせてくれる機会でした。私たちはどこかの時点で、「自分の目から丸太を取り除く」体験が必要なのです。

ある人は聖書朗読を通して、「自分の目から丸太を取り除く」体験を積みまします。聖書朗読を依頼される人全員が聖地巡礼を体験すれば素晴らしいですが、せめて巡礼した人の話に耳を傾けるなら、朗読の中身が「心からあふれ出ることを語る」ものになります。

「ミサに行く」ことだけでも、「自分の目から丸太を取り除く」体験が必要です。二度目のイスラエル巡礼はクリスマス後の「降誕節」でした。「主の公現」のミサをガリラヤ湖畔の「ペトロの首位権の教会」そばにある野外祭壇でささげました。繰り上げミサでした。

翌日の日曜日は、ヨルダン川のベタニアという場所を訪ねました。ヨルダン川河畔は木が生えていましたがほかは見渡す限り砂漠です。そこに教会がぽつんと建っていて、どこから集まるのか、司祭・修道者・信徒がわんさか集まって、「主の公現の祝日のミサ」をおこなおうとしていたのです。一日かけて集まり、ミサに参加します。

その様子から、私は「自分の目から丸太を取り除く」体験を積みましました。ただ一つのこのために、人々が集まっていたのです。このミサに自分が生かされていると知っているから、集まることができるのです。

聖書を朗読し、聖歌を歌い、共同祈願を唱え、ミサの受け答えをする。生活の中で祈りをささげて生きる。どれも「心からあふれ出ることを」実行するチャンスです。何があなたの視界を遮る「丸太」となっているか考え、「自分の目から丸太を取り除く」体験を積みましましょう。

黙想会、クルシリヨ、聖地巡礼、赦しの秘跡、いろいろ考えられます。だれもが「自分の目から丸太を取り除く」必要のある人間なのです。